

7/21
朝日

安保法制 操られず声上げる

大学生

(京都府 21)

京都大学で14日開かれた学生と学者による安全保障関連法案に反対する緊急シンポジウムに、私も参加した。歌人で細胞生物学者の永田和宏氏が「今の政府は『積極的平和主義』など、文句を付けにくい、だが内実は恐ろしい言葉で我々を追い立てる」との旨を発言されたのが印象に残った。

安倍晋三首相は「米国の戦争に巻き込まれることは絶対にあり得ない」「私は総理大臣なんですから」などという言葉で操ろうとしているが根拠が全く見えてこない。国民の多くが納得していない中、首相はきちんと説明する義務がある。今回の安保法制では、海外で自衛隊が米軍などの支援活動ができるようになるが、弾薬などを提供するとは私は「戦争に加担している」と思いつく。周囲からもそう見られるだろう。今の法案には納得いかない。でも、誰かが行動を起してくれるのを待っているだけでは何も変わらない。法案が衆院で可決され、参院で審議が始まる今だからこそ、私たちは声を上げ続けていくべきだ。自分や大切な人の未来のために。

戦争体験 伝わっているのか

無職

(神奈川県 84)

1945年5月29日の横浜大空襲で私の家はなくなり、14歳の私と母、弟2人、末妹の5人で広さ3畳ほどの防空壕に身を寄せました。父は出征し、妹の1人は疎開中でした。

ある日、空襲中に2歳の末弟がおしっこをしたがり、弟と外に出ました。その瞬間、米軍のP51戦闘機の機銃掃射があり、弟を抱いて防空壕に駆け込みました。後で見たら、私の足跡がらわずか1路の所に弾痕がありました。

私は勤労動員で工場に通わなければならぬ身でしたが、母から「いつせ死ぬのなら母子一緒に」と言われ、防空壕を出られませんでした。

いつ死ぬか分からない恐怖と、特高(特別高等警察)にばれたらという二重の恐怖を感じていました。

体験を地元の小学校で話しています。子どもたちは懸命に聞いてくれます。「じいじの話して聞いてあげよう」と言ってくれます。

若い人たちに、もっと知ってほしいとブログも始めました。けれどアクセス数が伸びず、伝わっている実感がありません。自分の老いを感じながら、焦り、悩む日々です。